
わたしのおとうさん

ともゆき

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

わたしのおとうさん

【Nコード】

N2893E

【作者名】

ともゆき

【あらすじ】

警視庁組織犯罪対策部、通称「マル暴」の刑事の娘が誘拐された！
彼女のクラスメイトでもあるコナンたちは果たして彼女を救出できるのか？

前編

警視庁捜査一課。

「それじゃ、失礼しまーす」

ある事件を解決し、目暮警部たちと話をした江戸川コナンたち少年探偵団が捜査一課の部屋を出ようとしたときだった。

「あ、みんな、一寸いいかしら？」

佐藤美和子刑事がコナンたちに話しかけてきた。

「…どうしたの、佐藤刑事？」

「ん？ ちよつとね。実は君たちに話を聞きたい、っていう人がいるのよ」

「オレたちに？」

小嶋元太が言う。

「今から一寸いいかしら？」

「…どうする？」

コナンが聞く。

「オレはいいよ」

「ボクもいいですけど」

「あたしも」

元太、円谷光彦、吉田歩美の3人は即答で答えた。

「…灰原は？」

コナンが隣にいた灰原哀に聞いた。

「みんながそう言うのなら私も別にかまわないけど」

「そうか」

「それじゃ、目暮警部、今からこの子達を連れて行っていいでしょうか？」

「ああ、頼むぞ」

「さ、いらっしやい」

そして佐藤刑事の案内で5人は警視庁の庁舎を歩いていった。

佐藤刑事はなぜか5人は警視庁の外れのほうに案内して行った。

「誰がボクたちの話を聞きたい、って言ってるんですか？」

光彦がそう言ったときだった。

「この野郎！ いい加減にしねえか！」

廊下にまで響く怒鳴り声が彼らの耳に入ってきた。続いて机か何かを叩いたようなドカツ、という音がしたかと思うと、

「テメエ、警察ナメとったら承知しねえぞ！」

そのドスのきいた大きな声に思わず身をこわばらせる歩美。しかし、

「…相変わらずやってるわね」

佐藤刑事が平然としているのを見て、

「な、なんなんですか、今の？」

光彦が聞く。

「…ああ、対策部の取調べよ」

「取調べ？」

「そう、組織犯罪対策部 所謂マル暴ね の取調べよ。なにしろ相手が相手でしょ？ 相手に舐められたらいけない、って言うことで顔つきもこう言っては悪いけど、どっちが暴力団員かわからないような強面の人がばかりだし、自然と言葉遣いも乱暴なものになっちゃうのよ。腕っ節も相当な人が多いらしいわ。そういうこともあって警視庁でも組織犯罪対策部は別の場所にあるのよ。私もまだ対策部が捜査四課だった頃にここに来たんだけど、その頃は本当怖かったわ。実は今でもあまり付き合いたくない部署なのよ」

「ふうん…」

「でも、そんな対策部の人たちでも、みんな根はいい人たちよ。特に係長の村山さんなんて家に帰ればとても優しいお父さんなんだって」

「…ねえ、吉田さん」

灰原が歩美に語りかける。

「…なに？」

「…そういえば村山さんのお父さん、って刑事って話だったわよね」
「…そういえばそんな話聞いたことあったわね」

「村山って…、雪乃のことか？」

元太が歩美に聞く。

「うん。確かそんなこと言ってたわ」

「へえ、そうだったんですか。ボクたち村山さんと同じクラスだったのに、そんな話聞いたことありませんでしたよね」

光彦が言う。

「女の子だから、あまりオレたちは付き合いがないからね。同じ女の子の歩美ちゃんや灰原のほうが付付き合いが多いさ」

コナンが言う。

佐藤刑事が「組織犯罪対策部」とプレートがある部屋のドアを開ける。

「…村山警部、連れてきました」

中の様子を見て思わずたじろぐ5人。

そう、佐藤刑事の言うとおり、その中にいたのはいかにも、と言った感じの強面の男たちだったのだ。

その中のある係の「係長 村山隆士警部」と名札がある席に座っ

ていた男が佐藤刑事のほうを見ると、

「ああ、ご苦労」

「それじゃ私はこれで」

そういうと佐藤刑事は部屋を出て行く。

「ちょ、ちよつと佐藤刑事！」

思わず呼び止める元太。佐藤刑事がいなくなって何だか不安になっ
てしまったのだ。

男がドアに立ったままの5人に近づく。

そして歩美の顔をじっと見る。

「う…」

その眼光にこういった場には慣れているはずのコナンや灰原も思わず引いてしまった。

「…もしかして、君が歩美って子か？」

「は、はい…」

そのなんともいえない迫力に思わずたじろぐ歩美。と、

「そうかそうか。じゃ、君たちがその、娘の言っていた子達だな！
今までの表情とは打って変わって男が満面の笑みを浮かべた。と
はいえ強面でいきなり笑いかけられると言うのも逆の意味で怖いも
のだが。」

「それじゃあ、あなたが…」

光彦が聞くと、

「そうだそうだ。村山雪乃のお父さんだよ！ 君たちの話は娘から
聞いておるよ。ささ、ここで話もなんだから、中に入っておじさん
にいろいろと話を聞かせてくれないか？」

そういつて男 村山警部は部屋の中に5人を押し込むとともに、
近くにいた刑事に、

「おい！」

「はい」

「これで下の販売機で何か飲み物を買って来い」
と千円札を渡した。

*

別室で5人と村山警部が話をしている。

「…ほほう、そうかそうか。君たちも活躍しているんだな」

村山警部が感心したように言う。

「は、はい…」

「いや、娘は家で君たちの事をいろいろと話してくれるんだよ。そ
れに捜査一課の目暮警部とも知り合いだから、君たちの話もよく聞
いているんでね。一度こうやって話を直接聞いてみたかったんだよ」
「ははは…」

思わず苦笑するコナン。

確かに佐藤刑事の言ったとおり、村山警部も根はいい人のようだし、「家に帰ればやさしいお父さん」と言うのもなんとなくわかるんだが、やはりその強面はどうも慣れない。

「まあ、とにかく、これから娘と仲良くやってくれたまえよ」

「は…、はい」

そして対策部の部屋を出る5人。

「いやあ、怖かったなあ…」

元太がいう。

「そうですねえ。あんな顔で睨まれたら、あること無いこと全部喋っちゃいそうですね」

光彦が言う。

「でもあたしたちの話、随分と興味深そうに聞いていたじゃない」
歩美が言う。

「やっぱり同級生と言うこともあって気になるんでしょうかね」
光彦が言う。

そんな3人の会話を後ろで聞きながらコナンが灰原を「どう思う？」とでも言うのかのように見つめる。

灰原も軽く頷き返す。どうやら3人の言っているようなことを彼らも考えているようである。

*

そして月曜日の朝のことだった。

始業のチャイムが鳴り、1年B組担任の小林澄子教諭が教室に入ってきた。

「…それでは出席を取ります」

そして何人が出席を取った後、

「…村山さん。村山雪乃さん」

しかし返事は返ってこない。

「…村山さん、今日はお休みですか？」

見ると、確かに彼女の席は空いたままになっている。

「村山さんがお休みの理由、誰かわかりませんか？」

小林教諭がクラスの全員に話しかける。

しかしこれまた返事は返ってこない。

「先生、村山さんのお家から連絡は来ていないんですか？」

歩美が質問する。

「ええ。学校にも何の連絡も無いんだけど…。休み時間に村山さんの家に聞いてみようかしら…」

休み時間の職員室。

「…はい、はい。…そうですね。失礼します」

そう言うと小林教諭は電話を切った。

「小林先生、どうかしたんですか？」

隣の席に座っていた教師が話しかけてきた。

「…いえ、ウチのクラスの村山雪乃、って子が欠席したので、家に電話したところ、今朝家をちゃんと出た、って言ってるんですよ」

「何ですって？」

「ええ。彼女の母親が電話に出てきたんですが、いつもどおりに家の前で彼女を送り出した、って言うんですよ」

「となると…」

「それで彼女の父親が確か刑事をしているので連絡はしてみる、って言っていたのですが…」

「…そうですね。とにかく、校長にも知らせておいたほうがいいかもしれませんね」

「そうですね。今から校長にも知らせておきます」

1年B組の教室でもちょうど同じことが話題になっていた。

「…雪乃ちゃん、どうしたんだろう…」

歩美がつぶやく。

「なんか心当たりは無いの？」

コナンが歩美に聞く。

「心当たりと言われても…。たまに遊ぶ程度だからあまり付き合
がある、ってわけじゃないのよ。…あ、でも一度だけ雪乃ちゃん
家に遊びに行っただけがあるわ」

「それで？」

「うん…。雪乃ちゃんの家、って通りから入ったところにあるのよ。
それに、朝と夕方は人通りが多いんだけど、ちょうど雪乃ちゃん
が学校に行くころは人通りも少ないんだって」

「…所謂ベッドタウンというヤツか…」

「コナンがつぶやくと歩美が、」

「それがどうかしたの？」

「いや、何でもないよ。でも、もしかしたら…」

「もしかしたら、ってコナン君…」

「…うん。どうやら歩美ちゃんも同じ考えのようだね」

*

それと同じ頃、警視庁組織犯罪対策部の電話の呼び出し音が鳴っ
た。

「もしもし。…え？ わかりました、少々お待ちください。…村山
係長！」

と一人の刑事が村山警部を呼んだ。

「どうした？」

「奥さんからです」

そう言われて電話を代わる村山警部。

「オレだ。一体どうした？ …え、雪乃が？」

村山警部は一瞬言葉に詰まったが、すぐに冷静さを取り戻すと
「それで学校から電話があったのか？ うん、うん、…わかった。

知り合いの刑事が何人かいるから話はしておく。とにかくお前は連
絡を待て」

そして電話を切る。

「係長、どうしたんですか？」

一人の刑事が村山警部に話しかけてきた。

「今、学校から連絡があつて、娘の雪乃が学校に来ていない、と言っているらしい」

「お嬢さんが？」

「ああ。女房の話だと今朝ちゃんと家を出た、と言っているんだが……」

「それじゃあ、何か事故が事件に巻き込まれた可能性が……」

さすがに刑事となるとそっちのほうをすぐに連想するようだ。

「……かもしれないし、そうでないかもしれない。とにかく、交通課と捜査課の方に連絡はしておかないとな」

「それにしても、一体どうしたんでしようか……」

すると、もう一度電話の呼び出し音が鳴った。

「……オレが出る」

ちようどその場にいた村山が受話器を取る。

「はい、対策部」

「……村山警部ですか？」

「そうだが」

「村山警部あてに外線が入っています」

「……回せ」

すると程なく、

「……村山さんはあんたか？」

電話の向こうで男の声がした。

「……そうだが」

「いいか、一回しか言わないぞ。あんたの娘を預かっている」

「……なんだと？ 冗談だったら承知しねえぞ」

「冗談でこんなことが言えるか？ とにかくあんたの娘を預かっているんだ。返して欲しかったら次の連絡を待て」

「……待て！ 娘は無事か？」

「……心配するな。あんたの娘は無事だよ」

「声を、声を聞かせてくれ！」

しかし、電話は切れてしまった。

「係長、どうしたんですか？」

「娘を、雪乃を誘拐した、と言っんだ」

「何ですって？」

「勿論オレも冗談だと思ったさ。でも、娘の行方がわからなくなっていることと言ひ、電話と言ひ、ただの悪戯だとは思えん。それに……」

「それに？」

「又連絡をよこす、と言ってきているんだ」

「それじゃあ……」

「……ああ、とにかくありとあらゆる可能性を考えなければならぬからな。とにかく、今から捜査一課の目暮警部の所に行って事情を話してくる。もし何かあつたら捜査一課のほうに連絡をくれ。それから女房のほうにもオレから連絡しておく」

「わかりました」

(後編に続く)

後編

捜査一課。

「目暮警部、すまん。こんな面倒なことに巻き込んだりして…」
捜査一課に出向き、事情を説明した村山警部が言う。それに対し
目暮警部は、

「いや、それは気にすることはない。これは我々が扱う仕事だから
な。…ところで村山警部」

「…なんだ？」

「確かに、その電話の相手は娘さんを誘拐した、と言ってるのかね
？」

「ああ、間違いない。確かにそう聞いた」

「しかしなぜ、暴力団の仕業だと思うのかね？ 暴力団員と言った
ら…」

「ああ、覚醒剤の密売や拳銃密輸のほうは確実に資金源になるから、
そっちのほうの犯罪は多いんだが、誘拐なんてリスクばかりが大きい
犯罪には手を出さないものだが…。わざわざ対策部に電話をかけ
てきたところを考えると…」

「…そうか。今回あえてその犯罪に手を出した、となると、よつぽ
ど対策部や村山警部に恨みがあるものの犯行、と言うことが考えら
れる、ということか」

「…そう言うところだな」

「ところで、もし娘さんが誘拐だと考えると、犯人に対しての心当
たりみたいなのはないかね？」

「心当たりと言われてもなあ。知ってのとおり、暴力団の事務所な
んでいくらもあるからな。その中で米花町をシマにしている暴力団
と言ったら思い当たるのは3つあるな」

「その3つとは？」

「…外道組、極悪会、鬼熊組と言ったところだな」

「外道組、極悪会、鬼熊組か…。話は一課のほうにもいろいろ入ってきておるよ。いずれも一癖も二癖もある連中のような。聞いた話だと、資金源も相当あるらしいじゃないか」

「ああ。だからあいつらはあんな立派な事務所を持つことが出来るんだよ」

「…そうだったな。確か外道組の事務所は高速道路の南側にあつたし、極悪会は最近出来たビルの西側にあるマンションに事務所があるはずだし、鬼熊組は確か線路沿いの北側に事務所があるところだろう？」

「ああ。ただ、今の所どの組のモンがやったのか、とかそういうところかわからないんだ」

「心配することはない。ここはとにかく我々に任せてもらおうか」

「ああ、そうさせてもらおうよ」

と、そのときだった。

「目暮警部、よろしいでしょうか？」

一課の部屋に佐藤刑事が入ってきた。

「どうしたのかね？ 佐藤君」

「…いえ、この子たちがどうしても目暮警部に話したい、と言つるので…」

そしてコナンたちが中に入ってきた。

「…君たちは？」

村山警部もコナンたちに気がついたようだ。

「あ、村山警部。こんにちは」

コナンたちが挨拶をする。

「…一体どうしたんだ、今日は？」

村山警部が聞くと、

「…いえ。雪乃ちゃんが誘拐されたらしい、と言つことがわかって…」

歩美が言う。

「…なんでそんなことがわかったんだ？」

「…今日学校で、彼女が欠席したんで、何があつたのか、って学校で先生が電話をした、って言う話を聞いたんです。そして学校の帰りに雪乃ちゃんの家に行つてみたら、今朝はちゃんと家を出た、つてお母さんが言つてたから」

「…目暮警部。彼女が誘拐された、って本当なんですか？」

コナンが目暮警部に聞く。

「うーん…」

目暮警部はしばらく何事か考えていたが、

「そこまでわかつてるなら仕方ないが…。その可能性が大きい、と言うことだ。村山警部もそのことでわざわざ一課まで来たのだよ」

「それじゃあ…」

「まだ断定は出来かねるがな」

「…とにかく、犯人からまた後で連絡がある、と言う電話がおじさんにかかつてきたんだよ」

村山警部が言う。

「…それは本当か？」

目暮警部が村山警部に聞く。

「ああ、それは確かに聞いた」

「…よし。今から対策部にいこう」

そして組織犯罪対策部のある一角に捜査一課の刑事たちが集まる、と言うおそらく警視庁の中でも滅多にお目にかかることはないであろう光景が展開されていった。

*

夕方の5時を少し回った頃だった。

不意に対策部の電話の呼び出し音が鳴った。

「…オレが出る」

村山警部が言うと、目暮警部が目配せし、逆探知の依頼を行った。

「…もしもし」

「…村山さんだな」

「ああ、そうだが。娘は無事か？」

「大丈夫だ。あんたの娘はちゃんとここにいる」
その時だった。

「パパあ！」

電話の向こうで少女の叫び声が聞こえた。

「雪乃！」

村山警部が叫ぶ。

「パパ、あたし、怖いお兄さんたちと一緒に事務所みたいなところに閉じ込められているの。窓から太陽が当たって眩しい…」

「黙れ！」

そして電話の向こうでなにやら叩くような音と泣き声が聞こえてきた。

「雪乃！」

「…わかったな、村山さんよ。娘を返して欲しければ、3億円用意して米花駅までやって来い。いいな」

そう言うと言電話が切れた。

「もしもし！ もしもし！」

しかし、返事は返ってこない。

程なく、別の電話がかかってくる。どうやら逆探知の結果が返ってきたようだ。

「…そうですか。有難うございました」

そして佐藤刑事が電話を切る。

「…逆探知の結果は？」

目暮警部が佐藤刑事に聞く。

「…米花町内、と言うことまではわかったんですが…。おそらく、携帯電話が何かを使ったのではないかと」

「うん…、確かに携帯電話からかければ足が付かなくなる可能性は高いからな。全くここの携帯電話が普及すると、かえって逆探知もやりづらくなるな」

…と、電話の内容を聞いてからコナンはじっと考え事をしていた。
「…コナン君、どうしたの？　なんかさっきから考え事しているけど…」

歩美がコナンに話しかける。

「ん？　な、なんでもないよ。…でもなんか、今の電話、変だよなえ」

「何が変なんじゃ？」

「だって雪乃ちゃん、電話で『太陽が眩しい』って言ってたよなえ」
「それがどうかしたのか？」

「だって今は夕方でしょ？　確か外道組の事務所は高速道路の南側だし、極悪会はビルの西側だし、鬼熊組は確か線路沿いの北側でしょ？　どう考えても太陽が直接見えないじゃない」

「…そうね。確か太陽は東から上るはずよ。西から上る、なんてことはまずあるわけないわよね」

「コナンの考えを理解したか、灰原も言う。」

「…ん？　ちよつと待てよ」

目暮警部が言う。

「どうしたんだ、目暮警部」

村山警部が聞く。

「…コナンくんたちの言うとおりだとすると、彼女は何か反射した太陽を見たことになるな。例えば鏡とかガラスとか…」

「…となると、雪乃を誘拐したのは極悪会の連中か！」

「何でそう思うのじゃ？」

目暮警部が言う。

「…外道組の事務所は高速道路沿いで、しかも高速道路は事務所の北側にある。そして鬼熊組の事務所は線路沿いだ」

「そうか。高速道路沿いにしろ、線路沿いにしろ、車や電車の走る音が電話の向こうから聞こえてくるはずだな。それに彼女の言っていた『太陽がまぶしい』と言う言葉も極悪会の事務所の東側にある

ビルの窓が太陽を反射している、と考えれば確かに納得がいくな

「…とにかく行ってみよう！」

「ああ」

そして捜査一課の部屋を出て行くこととしたとき、

「佐藤君」

目暮警部が佐藤刑事を呼んだ。

「…この子達を頼むぞ」

「わかりました」

そして目暮警部が部屋を出て行くと、

「…さ、君たちももう帰りなさい」

佐藤刑事が元太たちに言う。

「え〜？ でも…」

「ここから先は私たちの仕事なの。ね、私が送ってあげるから、今日はもう帰りなさい」

「…はい」

佐藤刑事の言葉にしぶしぶ頷く元太たち。と、コナンが、

「…灰原、ちよっと頼みがある」

そして捜査一課の部屋を出、佐藤刑事の車に乗り込んだときだった。

「…あれ？ コナン君、どこ行っただんでしょう？」

光彦が辺りを見回す。

「…そう言えばどこ行っただんだアイツ？」

元太も言う。

「…そういえばさっきからコナン君いなかったわね。おしっこにでも行ったのかと思ってたんだけど、それにしても長いし…」

「…ねえ灰原さん。コナン君どこ行っただのか知りませんか？」

「さ…、さあ、何処行っただのかしらね」

*

数台のパトカーが極悪会の事務所の前に停まった。

「…ここだな」

その中の1台の覆面パトカーの中にいる目暮警部が事務所を見上げながら、運転席の村山警部に確かめる。

「ああ。ここが一番上の階がヤツらの事務所だ」

「…とにかく何かあったら大変じゃな。念のために確かめておこう」
そして目暮警部がホルスターからリボルバー式の拳銃を取り出したときだった。

「…あれ？ 車間違えたかな？」

後部座席で聞き覚えのある声が出た。

その声に慌てて後ろを向く二人。

「…コナン君！」

そう、後部座席からコナンが顔を出したのだった。

「何で君がここにいるんじゃ？」

「だって送ってくれるって言うから、この車で送ってくれると思っ
てたのに。全然違う方向に走っていくからおかしいな、とは思って
ただけだなあ…」

勿論これは口実で、実際には自分の考えが正しいかどうか確かめるために隙を見て覆面パトカーに乗り込んだのだった。そのため
コナンは灰原に「元太たちには適当なことを言っでごまかしておい
てくれ」と頼んでいたのだった。

「…ったくも…。どうする、村山警部？」

「ここまで来ちまったモンは仕方ねえだろ」

「それもそうだな。いいな、コナン君。大変に危険だから、ワシら
が戻ってくるまで君は絶対この中にいるんじゃぞ。その後でワシが
毛利君のところへ君を送ってやるから」

「うん、わかったよ」

「…よし、行くぞ！」

そして目暮警部たちが覆面パトカーを降りた。

勿論、目暮警部の言うことを聞いて、おとなしく車の中で待つて
いるコナンではない。

目暮警部たちの姿が見えなくなるのを確認すると、車を降りてビルの中に入っていった。

*

最上階に行くと目暮警部、村山警部の二人と数人の警察官がある部屋のドアの前に立っていた。

コナンはそれを物陰から見ている。

「…いいな」

村山警部の言葉に頷く目暮警部。

そして村山警部がドアをノックする。

「…誰だよ？」

中から声がする。

「…警視庁の村山だ！ 話があるからドアを開ける！」

その声を聞いた瞬間、ドアの向こう側でなにやらどたばたするよ
うな音が聞こえた。

「これは…」

村山警部はそうつぶやくと目暮警部が頷く。

「よし、行くぞ！」

村山警部はそう叫ぶとドアのノブをひねる。

思ったより簡単にドアが開き、

「雪乃！」

村山警部のドスの聞いた声が響く。

「…パパあ！」

この声を聞いた一人の少女が答える。

父親の声を聞いた村山雪乃が抱きついてきた。

「雪乃、怪我はないか？」

「あ〜ん、怖かったよお」

そう言うと雪乃は大声で泣き始めた。

「…よしよし、もう大丈夫だからな」

「…いやあ、本当に娘さんが無事でよかったですな、村山警部」
「いやいや、こちらこそお手数をおかけしまして」

そう言うと村山警部は改めて彼女の誘拐犯たちのほうを向くと、例のドスの効いた声で、

「…やい、テメエら。こんなことをしたからには、タダで済むと思うなよ！」

目暮警部たちに連れられ、犯人たちが連れて行かれる。

(…どうやらオレの思ったとおりのようだな…)

その姿を見てコナンは「安心した。」

(…さて、急いで戻らなきゃ…)

そしてコナンは急いで自分がいた車に引き返した。

程なく村山警部の家と帝丹小学校に「人質を無事に救出した」という連絡が行き、村山雪乃の母親や小学校の関係者もほっとすることとなる。

そしてコナンは自分ひとりで勝手な行動を取った、と言うことで元太たちにしばらくうらまれることになるのだが、それはまた後の話である。

*

夜8時をすぎた頃だった。

目暮警部がそろそろ帰宅しようか、と荷物をまとめていたときだった。

「…よかった、まだいたか」

捜査一課のドアが開くと、村山警部が入ってきた。

「…村山警部、いいのかね？ 今日くらいは早く帰ればよかったのに」

「そうしたかったんだが、こっちもいろいろあってね」

「…今回の事件の件か？」

「ああ」

「…それで、どうなったんじや？」

「…あの後、極悪会の組長を呼んで取調べをしたんだが、自分は関係ない、若い連中が勝手にしたことだ、とよ。それで、事件が発覚してから連中を破門したから、これからのことは極悪会は一切関係ないとも言っていた」

「…だろうな。組長としても自分に火の粉が降りかかるのを恐れてんじやろ」

「…まあ、この程度でオレだって連中の息の根を止めることは出来ないと思っただがな。でもこれからも連中のことはしっかりとマークしていくつもりだ」

「ああ、そのほうが懸命だと思うぞ」

「それにしても、今回は本当にすまなかったな」

「なあに、困ったときには一課でも出来る限りのことはしてやるぞ」

そのかわり、こっちが困ったときはよろしく頼むぞ」

「わかってる、って」

*

事件から1週間ほど過ぎたある日のこと。

「それじゃ行ってきまーす」

コナンがドアを開けて出て行った。

「気をつけてね」

それを見送る蘭の背中が小五郎が、

「…なんだ、今日は学校は休みじゃないのか？」

「あら、知らなかった？ 今日父兄参観日なんですって」

「ふーん」

*

帝丹小学校。

今日の授業参観は国語を行うことになっていた。

コナンはさりげなく後ろを見る。

(…やっぱり来てたか…)

そう、父兄の中に村山警部の姿を見つけたのだ。

警視庁で見たとときはそれほど感じなかったが、こうして一般の父兄に混ざっていると、確かに違和感を感じるような、一種独特のオーラを感じるような強面である。

とは言え、他の父兄と二言三言会話を交わしているのを見ると、確かに佐藤刑事の言うとおり根はいい人なのかもしれない。

「それじゃ皆さん。今日はこの間書いた『私のお父さん』『私のお母さん』の作文を読んでもらいます」

小林教諭が言うと、

「はい！」

1年B組の児童たちの返事が返ってきた。

「…えー、それでは次は村山さんをお願いします」

「はい！」

そう言われて村山雪乃が立ち上がった。

先日の上の事件のことは後ろにいる父兄たちも知っているようで、小声で話している親もいる。

「『わたしのおとうさん』1年B組 村山雪乃」

村山雪乃が作文を読み始めた。

「私のお父さんは警察で刑事をしています。毎日のように事件があるといつては家にいない日が多いので、私はなかなかお父さんと一緒にいる時間がありません。でもそんなお父さんもたまの休みには私と一緒によく遊んでくれるし、とても優しいお父さんです。この間もこんなことがありました…」

と例の事件についてのことを題材にした内容の作文を読んでいく。やはりまだまだ小学1年生と言うこともあってか、かなり怖い思いをしたようだが、父親が必ず助けに来てくれる、と言うことを信じ

ていたので、助かったときは本当にほっとしたようだ。

「だから私はそんなお父さんが大好きです。お父さん、これから悪い人を大勢捕まえて私たちが安心して過ごせる町にしてください」
作文を読み終えた後、父兄たちから拍手が起こる。

さりげなく父兄たちのほうを見るコナン。

村山警部が感動のためか小刻みに体を震わせている。

さすがにここで泣いたらまずいと思ったか、涙をこらえているようだ。

(… 鬼の目にも涙、か)

(終わり)

後編（後書き）

こんにちは、ともゆきです。

実はこの話は一番最初に思いついたのはラストだったんですよ。

で、この話をどういう形に持っていきようか、と思ってこういう形になったんですよ。

で、この話書いて思ったのは「つくづくオレは灰原哀に思い入れがないな」ということでした（笑）。

実は今回の話は少年探偵団メインの話である以上、灰原を出さなければいけないんですが、彼女をどう書いたらいいかわからなかった部分が多かったんですよ。

そのせいかどうかわかりませんが、ちょっと彼女のことを突き放して書いている部分があるかもしれませんね。

（まあ、「哀ちゃん好き好き」と言う人を不快にさせるようなことはしていないつもりですが）

それではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2893e/>

わたしのおとうさん

2008年11月7日07時31分発行